

## 琉球放送

|      |                               |
|------|-------------------------------|
| 活動名  | 小学校社内見学「放送局の仕事とメディアリテラシーについて」 |
| 実施期間 | 令和7年10月～令和8年1月                |
| 実施回数 | 社内見学時4回                       |

【実施学校】 南風原町立翔南小学校、オキナワインターナショナルスクール、  
豊見城市立ゆたか小学校、金城小学校（特別支援クラス）

### 【事業実施の成果・課題】

#### <事業の成果：座学と実体験の相乗効果>

今回の事業では、座学と社内見学を組み合わせたカリキュラムを実施した。事前に概要を把握した上で実体験に臨むことで、児童の理解をより深化させることができたと感じる。

具体的には、テレビ局の「心臓部」であるテレビマスターで放送の仕組みを学び、屋上では送信アンテナの実物を見学。さらに、報道局（ニューススタジオ・副調整室）や、ラジオスタジオでの生放送の様子を間近で見学した。各現場の担当者が直接説明を行ったことで、放送業務のリアリティと臨場感を伝えることができた。

#### <柔軟な対応と学習の補完>

教材として活用した民教協のVTR「ニュースができるまで」は、児童が楽しみながら学ぶ姿が見られ、高い学習効果が得られたと感じる。一方で、見学時間の限られた学校や特別支援学級においては、長尺のVTR視聴が困難な場面もあった。これに対しては、事前に準備していたスライド資料を活用し、記者や放送局の動きを凝縮して解説するなどした。その結果、児童からは「情報を伝えるための工夫を学ぶことができた」との感想を得られ、個々のニーズに合わせた学習支援が可能となった。次年度以降も状況に応じて対応していきたい。

### 【事業担当者・講師の感想】

- アナウンサーのお仕事紹介コーナーでは、子どもたちから「仕事で一番辛かったことや、嬉しかったことは？」という質問が寄せられた。沖野アナは、仕事の厳しさについて「自分の言葉が何百万人という非常に多くの方に届くため、その責任の重さを常に感じている」と回答。一方、仕事のやりがいに関しては「ラジオを聞いたリスナーから『励みになります』『明日も頑張ろうと思えました』といったお便りをいただいたとき、自分の仕事が誰かの力になっていると実感できて、本当に嬉しい」と語った。言葉を届ける仕事の魅力を伝えることにつながったのではないかなと思う。
- 子どもたちから寄せられた質問は、「なぜその道を選んだのか」という原点から、「ネタの決め方」や「失敗への対処」といった具体的なスキルの話まで多岐にわたり、彼らの観察眼の鋭さに驚かされた。子どもたちの真っ直ぐな瞳から放たれる質問に、一つひとつ言葉を選んで答える時間となり、自分自身と対話するような貴重な経験になった。

- ・座学だけでなく五感を刺激する体験型の工夫を凝らしたことで、児童の知的好奇心を最大限に引き出すことができたと感じる。特に、普段キャスターが使用しているスタジオやクロマキー技術を間近で体験する際の、児童たちの生き生きとした表情や驚きは、実体験を伴う学びが「ワクワクする心」を育む上でいかに重要であるかを再確認させてくれた。放送局が情報を伝えるために重ねている工夫を、児童ひとりひとりの心に届けることができたと感じる。

## 【教諭・子どもたち・視聴者などの感想】

### <豊見城市立ゆたか小学校 子どもたちの感想>

- ・RBC のマスター室で説明を聞いているうちに、「どこかで聞いたことがあるな」と思いました。それは教科書にも載っていた、放送局で一番大切な場所でした。実物を目の前にして、ここが放送を支える「心臓部」なんだと改めて実感しました。
- ・放送局が私たちに情報を伝えるための工夫を学ぶことができました。ニュースのネタに関しては、「驚き、楽しみ、新しい」を軸にしていることがわかりました。